

石田一良名誉会長逝く

日本思想史学会名誉会長石田一良先生には、二〇〇六年九月一七日急逝された。

五月、本学会編集委員会から石田先生の追悼文執筆の依頼を受けた。「日本思想史学会の設立・発展に関する石田名誉会長のご功績を中心に」記述されたいとの注文付である。

ところで、石田先生の学術上の卓抜な業績は①独自の文化史学的方法に立脚した日本文化史・思想史に関する学問上の業績と②日本思想史学会の設立をはじめとする研究組織形成上の業績とから成り立っており、①と②とは密接に結合していることが見逃しがたい。①については、これを②とは別個に取り上げることが可能であるが、②については、これを①と別個に取り上げることが不可能ないし無意味だといっている。

ここでは、右の事情を踏まえて、先生の学術上の業績の総合的把握をめざして、①と②の両面に目配りする視点をとる

玉懸 博之

こととしたい。

このような視点は、先に私が『季刊日本思想史』第七〇号（二〇〇七年三月）に掲載した石田一良先生追悼文の視点と近似しており、以下の記述も右の先稿と重なるところが少なくないが、容赦をいただきたい。

石田先生は一九一三年（大正二）京都に誕生された。旧制三高を経て三四年に京都帝国大学法学部に入学されたが、翌三五年文学部に転じられた。三九年（昭和一四）史学科国史学専攻を卒業し、大学院に進まれた。この間文化史研究の泰斗・西田直二郎博士の指導の下、非常な研鑽を積まれた。

先生は、終戦直後の四六年（昭和二一）二月同志社大学文学部の助教授となり、四八年には教授に昇進された（三三歳）。関係者（特に先生）の尽力によって四八年四月学部に、五一年には大学院に文化史学専攻が設置された。文化史関係の専攻の設置は当時ほとんど不可能とみなされていた。文部

省から認可を引き出した、先生の交渉の見事さは今でも語り草になっている。

五〇年五月、先生は全国の同志に呼びかけて文化史学会を設立してその代表となり、機関誌『文化史学』を発刊し、年次大会の開催をも開始された。終戦直後の社会経済史全盛の当時にあつて、全国規模の文化史学会の結成と活動とは快挙と呼んでいいものだった。

先生は五一年七月『文化史学の理論と方法』を刊行し、五年加筆して『文化史学 理論と方法』を刊行された（改訂版は五七年）。

この書は、「文化史学」（先生は一般の文化史と区別して自らの文化史をこう呼ぶ）に理論的基礎づけを与えようとした意欲作で、その内容は広くかつ深い。詳論の余地はないが、次のことだけを記しておきたい。

先生はこの書で、歴史学の方法論たる以上まさに答えなければならぬいくつかの重要な問題——歴史とはいかなるものとみなすべきか、歴史学において人間を内側からしかも奥深くから捉えることはいかにして可能か、古き歴史事象を対象にした研究がいかにして「私の歴史学」となりうるか、客観的歴史認識はいかにして可能となるか、など——に「運命」、「文化」、「間柄」などの独自の概念を通じて答えようとしていることである。

先生のその主張は、今もなお私たちにいくつもの大きな問

いかけをなしている（詳しくは拙稿「石田先生の学風と業績」〈『文化』四〇―三・四、一九七七〉を参照）。

先生の名著の一つ『浄土美術』は、同志社時代の代表的著述である。

さて、先生は五八年（昭和三三）五月京都・同志社大学を去り、仙台・東北大学に赴任され、文学部文化史学第一講座（二六三年日本思想史講座と改称）を担当された。当時四五歳。仙台・東北大学を日本思想史研究界の中心地たらしめようとする強い意欲と使命感を持ち鋭意研究と教育に従事された。

五八年九月には、思想史研究の方法論を示した「生活と思想——文化史学における思想史研究の課題と方法・試論」（『国民生活史研究』三）を世に問われた。

この論考は新カント派に連なるハルトマンの哲学史的方法とマルクスの唯物史観的方法を止揚して、新たな思想史の方法を樹立しようとした意欲作で、戦後世に出た思想史の方法論のうち最重要なひとつといつていい。

東北大学時代の先生は、この方法論を駆使して、高さ大きさを持つ学的成果を生み出された。あえて代表的著述を挙げれば、「愚管抄の成立とその思想」（二九六七）、「近世封建社会と日本朱子学派の思想」（二九六三）、「日本の開花」（大世界史二二、一九六八）などであろうか。

先生は、東北大学着任一年後の五九年、日本思想史研究会を組織してその代表となり、月例研究会を持ち、会報を発行

された。六二年には、広く全国の日本思想史の研究者に呼びかけて、第一回日本思想史研究会大会を東北大学で開催された。六四年に第二回大会を、六六年に第三回大会を、六八年には第四回大会を開催された。

この大会に集まった主な顔ぶれは、官学から、柴田實、伊東多三郎、古川哲史、芳賀幸四郎、渡部正一、西尾陽太郎、大内三郎、戸頃重基、私学からは、海老沢有道、今中寛司、笈泰彦、西田長男、福井康順、荻野三七彦、の諸氏であり、事務局のある東北大学からは、矢島羊吉、梅沢伊勢三、平重道、高橋富雄の諸氏がこれに加わった。

“会則なく役員組織なく、特定の歴史観に拘われることなし”というのが会を支える先生の理念であった。

日本思想史研究会大会が数度開催されるうち、期せずして会員の間に、日本思想史研究のための正式の学会を結成したいとの気運が高まり、ついに六八年（昭和四三）十一月一日、東北大学において日本思想史学会の設立総会がもたれ、日本思想史学会が発足した。会長に石田先生が推され、会則や役員組織などが定められた。

学会役員―評議員は発足当時二三名で、その中から今中、梅沢、大内、相良の諸氏が委員として学会の経常的実務に当たることになった。事務局は東北大学文学部日本思想史研究室に置かれた。

年次総会・研究発表大会を、昭和の奇数年に東北大学で、

偶数年に他の大学で開くこと、機関誌『日本思想史学』を年一回発行することを決めた。

会員数は発足当時百名に満たなかったが、八〇年には約三百名に増加した。石田先生は八六年まで会長を勤められ、会長辞任とともに名誉会長に推された。

日本思想史学会の設立とその後の基礎固めは、石田先生によってなされたのである。

さて、先生は、七六年東北大学退官の前年、同志に呼びかけて日本思想史懇話会を結成してその代表となり、『季刊日本思想史』を発刊された（市販もされる）。

各自が自由な立場で日本思想史という学問の可能性を追求することを標榜するこの会は、現在通算七十号に及ぶ会誌を刊行して、二十世紀から二十一世紀にかけて、日本思想史学の振興と普及という役割を着実に果たしている。

七七年四月、先生は東海大学に移り、同大学の文明学科の創設に深く関わり、日本文明学の学としての確立にも寄与された。

東海大学に赴任して後の主な著述を挙げれば、『カミと日本文化——日本文化序説』（一九八三）、『日本文化史——日本の心と形』（一九八九）になろうか。

最後に、これまでの記述を踏まえ、先生の学術上の活動のうち特に意義深い点をいくつか抽出し、そして先生が畢竟いかなる存在であったとみなしうるかについて私見（まさに私

見)を述べたい。

この点について私は、前掲拙稿(二〇〇七年三月)での記述内容に加えるものを持たない。そこで先稿の末尾をそのままここに掲げさせていただく。

第一は、詳論の余地はないが、先生自ら創出した文化史学的方法の意義である。人間をその内側からしかも奥深くから捉えることを期したこの「人間学」としての文化史・思想史の方法論」は、今もわれわれに多くを教えかつ問いかけてやまない。

第二は、先生がこの方法を駆使して、あらゆる時代・あらゆる領域の事象を対象としたこと、そして個々の事象についてのみならず日本文化史・思想史の全体的形姿について独自の見解を打ち出したことである。この点は、空前にして絶後ではないのか。しかも、その業績は、新しさ、大いさにとどまらず、独特の「香氣」をもそなえていた。

第一、第二を合わせるとき、先生こそが単なる歴史研究者を越えた「歴史家」であった。

第三に先生は、新たな研究組織を形成・運営する上で卓抜な能力を発揮され、第四に大学行政上で後世語り草となるほどの手腕をも発揮された。

これらを合わせるとき、先生こそが「天の生なせる才」
|| 天才であったという外ない。

先生がわれわれに教え、問いかけられるものは二〇〇六年九月一七日以後も多大である。

付記

石田先生の学問的業績の大きさと意義とについて、記述できなかったことが多い。この点に關し、前掲の拙稿の外に、玉懸『日本文化史』刊行に寄せて―石田一良氏50年の研究の成果―(『河北新報』一九八九年三月二八日)を是非参照していただきたい。なお、東北大学日本思想史研究室『日本思想史研究』第四〇号が、先生の追悼記事を組み、先生の経歴や業績目録を掲載予定ときくので、これらをも閲読していただきたい。

(日本思想史学会元会長・東北大学名誉教授)